

琉球列島における旧石器時代から縄文時代草創期にかけての越境と交流

佐野 勝宏

(東北大学東北アジア研究センター)

1. はじめに

琉球列島における交流の歴史は、北琉球、中琉球、南琉球で異なり、中国・台湾や九州島を越境した交流は、時代や地域によって変化する(新里 2013; 山崎 2012)。近年では、サキタリ洞遺跡や白保竿根田原洞穴遺跡での調査研究や、既存標本や遺跡の再評価により、後期更新世の琉球列島の様相が少しずつ明らかになり始めた(Kaifu and Fujita, 2012; Kaifu et al., 2015; 山崎 2015; 藤田・山崎 2022; Kaifu, 2022)。また、琉球列島における縄文時代並行期の調査の進展により、縄文時代早期以降の文化圏の変遷についても明らかになりつつある(山崎 2015, 2022)。一方、徳之島の下原洞穴遺跡の発掘調査で隆起線文土器が出土したことにより(具志堅編 2020)、縄文時代草創期初頭の文化圏が、中琉球まで及ぶ可能性がでてきた。徳之島は、現状で旧石器時代の石器が見つまっている日本最南端の地域であり、その南と北で異なる文化圏が存在していた可能性がある。本稿は、後期旧石器時代前半期、後期旧石器時代後半期、晩氷期の3段階に分けて、琉球列島における旧石器時代から縄文時代草創期にかけての交流の歴史を概観する。

本稿で対象とする沖縄島のサキタリ洞遺跡や徳之島の下原洞穴遺跡は、現在も発掘調査中であり、その全容は解明途上にある。したがって、本稿では、『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査報告書 I』(山崎編 2018)や『下原洞穴・コウモリイヨ-遺跡発掘調査報告書』(具志堅編 2020)刊行時点での成果に基づいて記載する。遺跡の年代的な位置づけは、主に炭素 14 年代値に基づくが、その校正年代は校正プログラム OxCal (4.4) の校正曲線 IntCal20 (Reimer et al., 2020) を用いた。なお、上記の3段階のいずれかの時期に特定できない人類化石出土遺跡や石器出土遺跡ならびに表面採集遺跡は本稿では扱わない。

2. 後期旧石器時代前半期 (37 - 30 ka)

琉球列島における後期旧石器時代前半期の人類の滞在痕跡は、北琉球、中琉球、南琉球全ての地域で確認されている(図 1)。現時点で上記の条件を満たす遺跡数は、南琉球で 1 遺跡、中琉球で 6 遺跡、北琉球で 2 遺跡、合計 9 遺跡である。

現状、琉球列島で最古の遺跡は中琉球沖縄島の山下町第 1 洞穴遺跡で、III 層で出土した炭化物(Kobayashi et al., 1971)が校正年代で 39.4 - 34.7 kcal BP(中央値 36,810 cal BP)となる。本洞窟では、VI 層からヒトの大腿骨と頸椎が出土し(Suzuki, 1983)、III-V 層ユニットと同時期と評価されている(Kaifu and Fujita, 2012; Takamiya et al., 1975)。サキタリ洞遺跡では、I 区の VII 層で小動物骨、甲殻類、陸産貝類と一緒に人骨が出土しており、同層で出土した炭化物やカワニナの年代値 9 点(山崎編 2018)は、校正年代で 35.5 - 23.8 kcal BP となる。南琉球宮古島のピンザアブ洞穴遺跡で出土した人骨は、炭化物の年代(浜田 1985)から 34.5 - 28.1 kcal BP と推定される。上記の遺跡では、古本州島や北海道とは異なり、剥片石器は出土していない。しかし、山下町第 1 洞穴遺跡では、砂岩礫が 3 点出土している(藤田・山崎 2022)。

一方、中琉球の徳之島では、天城遺跡で台形様石器群に属すると考えられるチャート製の剥片石器が出土している(図 2)。同遺跡は、台形様石器、抉入石器、削器、彫器等が出土した一方、石鏃

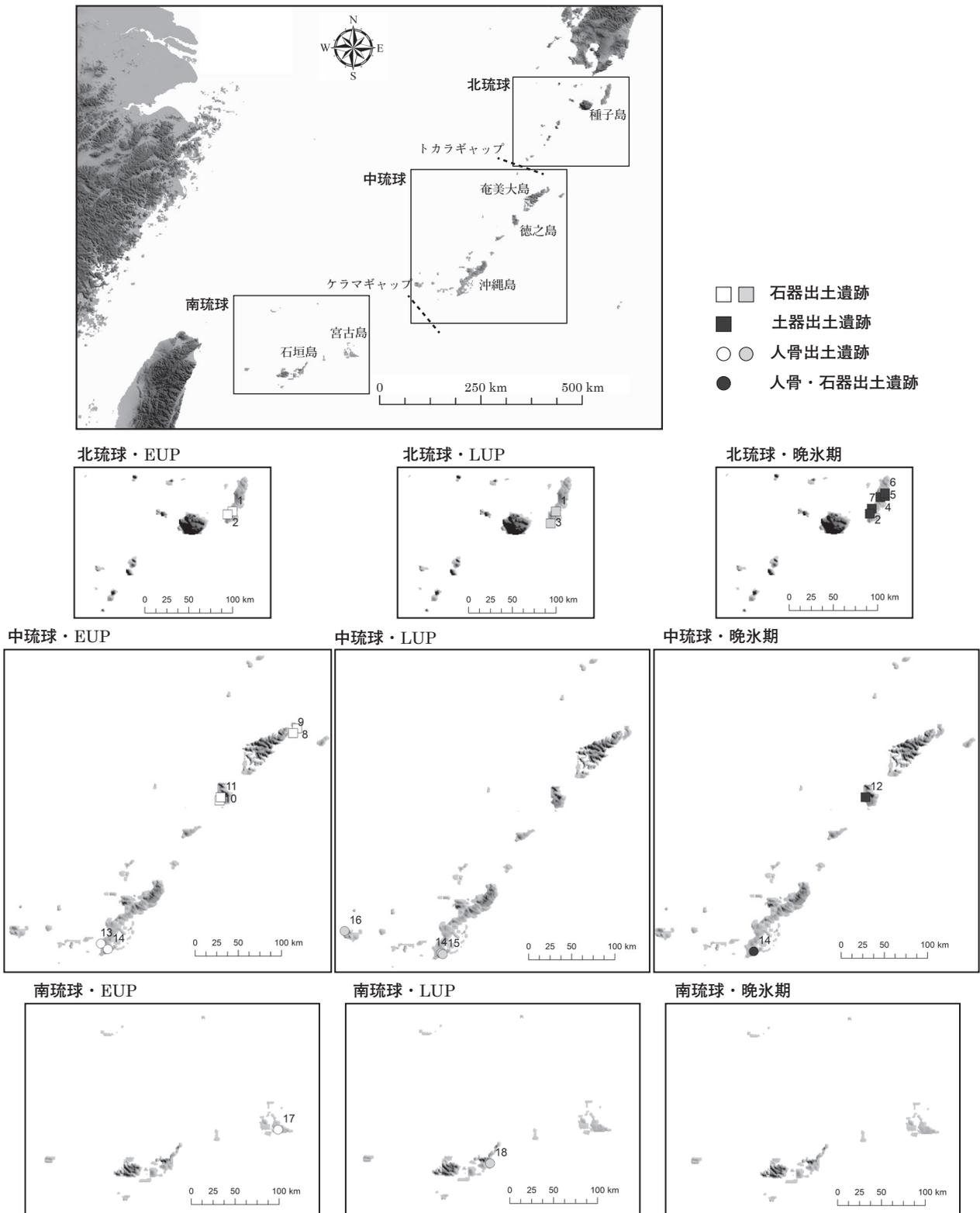


図1. 琉球列島における後期旧石器時代から晩氷期にかけて遺跡分布

EUP:後期旧石器時代前半期 (37-30 ka)、LUP:後期旧石器時代後半期 (30-15 ka)、晩氷期 (15-11.7 ka)。1. 立切、2. 横峯 C、3. 銭亀、4. 三角山 I、5. 奥ノ仁田、6. 鬼ヶ野、7. 平松 B、8. 喜子川、9. 土浜ヤーヤ、10. 天城、11. ガラ竿、12. 下原洞穴、13. 山下町第1洞穴、14. サキタリ洞、15. 港川フィッシャー、16. 下地原洞穴、17. ピンザアブ洞穴、18. 白保竿根田原。

や石斧等の縄文時代の石器が共伴しないことから、旧石器時代の遺跡と判断された（堂込・栗林編 1994）。筆者等は、天城遺跡の年代を特定するため、2017年度と2018年度に同遺跡の発掘調査を実施したが、台形様石器を含むチャート製石器は原位置を留めていないものと考えられ、時期の特定には至らなかった。天城遺跡の台形様石器の素材剥片は、最大幅を打面付近に持ち、平坦打面で打点が明瞭で、バルブが発達しており、縄文時代の石鏃の素材剥片とは大きく異なる。また、台形様石器は、平坦、鈍角、両方の二次加工が軽微に施されることで作られ、抉入石器が比較的多く共伴している。そのため、九州島で始良丹沢火山灰（AT）の上位で出土する入念にブランディングが施される台形様石器の石器群とも異なる。したがって、詳細な時期の特定は困難なものの、古本州島に由来を持つ後期旧石器時代前半期の石器群と考えられる。

中琉球では、奄美大島でも後期旧跡時代前半期に相当すると考えられる剥片石器が出土している。土浜ヤーヤ遺跡では、IIIb層とIIIc層でAT由来の火山ガラスが検出されており、IIIc層最下部より頁岩製の削器、剥片、碎片が出土している（旭・牛ノ濱編 1988）。研磨痕のある剥片も3点出土し、磨製石斧の一部であった可能性が指摘されている。同じく奄美大島の喜子川遺跡では、ATの火山ガラスが検出されたIX層・X層において礫群（積石）と炭化物集中が確認され、XII層のマーヅ層直上からチャート製の剥片が出土している（田村・池田 1995）。喜子川遺跡の1号積石で回収された炭化物は、較正年代で31.1 - 28.0 kcal BPとなる。土浜ヤーヤ遺跡や喜子川遺跡の剥片石器は、その性格は判然としないものの、出土状況よりAT降灰以前の所産と考えられる。

徳之島のガラ竿遺跡では、AT下位から「磨石」が2点出土している（四本・伊藤 2002）。ガラ竿遺跡は、徳之島西側の石灰岩の台地上に立地する。周囲にはドリーネ地形が拡がり、ガラ竿遺跡では緩やかな窪地上の地形にATが堆積し、その下の暗茶褐色粘土層から砂岩製の礫器が2点出土した（図3）。年代測定値がないため正確な年代は不明であるが、AT降灰以前に残された礫器と考えられる。

北琉球の種子島でも、立切遺跡群や横峰C遺跡で礫器が多数出土している。立切遺跡群では、種III火山灰と種IV火山灰の間のI文化層（XIII層）から、礫群、焼土、土坑、陥し穴の他、多数の礫器と刃部磨製石斧や鋸歯縁石器等が出土しており（山元ほか編 2012）、九州島南部の前半期石器群との共通性がうかがわれる。横峰C遺跡も、種III火山灰と種IV火山灰の間のI文化層（XIII層）で人類の活動痕跡が見つかり、礫群が炭化物集中と一緒に出土している（坂口・堂込編 2000；石堂・中村編 2005）。これらの遺跡は、石器群と種III・種IV火山灰との上下関係が明白であるため、較正年代のベイズモデルにより年代の絞り込みを行った（寒川・佐野 2020）。その結果、立切地点は、I文化層の開始年代が35.1 kcal BP、終了年代が34.5 kcal BPとなる。横峰C遺跡は、I文化層の開始年代が35.2 kcal BPで、終了年代は33.5 kcal BPとなり、立切遺跡とほぼ同じ時期に人類の滞在が開始されたと思われる。

3. 後期旧石器時代後半期（30 - 15 ka）

後期旧石器時代後半期に入ると、琉球列島の遺跡数は減少する。南琉球が白保竿根田原遺跡の1遺跡、中琉球は沖縄島の港川フィッシャー遺跡とサキタリ洞遺跡、久米島の下地原洞穴遺跡の3遺跡、北琉球は種子島の立川遺跡群と銭亀遺跡の2遺跡で、合計6遺跡である。1000年当りの遺跡数で見ると、前半期が1.29であるのに対し、後半期は0.40と低い。

南琉球の白保竿根田原遺跡では、遺物は見つからないものの、多くの人骨が出土している（仲座編 2017）。更新世のIV層からIIIC/D/E層で出土した人骨は20体以上に及び、その年代は27.8 - 20.9 kcal BPと幅がある（仲座編 2017）。この年代幅の長さは、この島に一定期間人類が生存してい

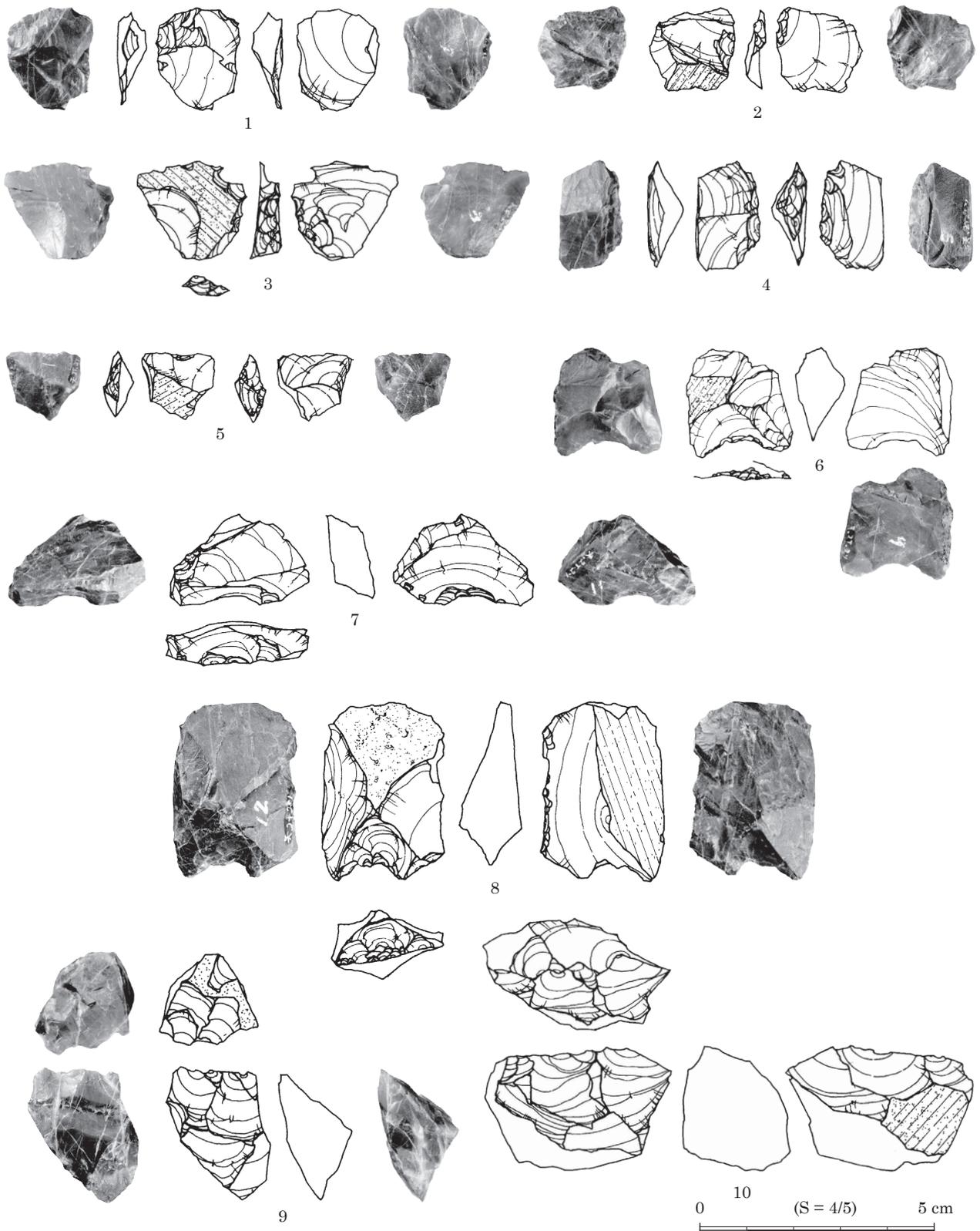


図2. 徳之島天城遺跡出土石器 (伊仙町歴史民俗資料館蔵)

1-5. 台形様石器、6-8. 抉入石器、9-10. 石核。(実測図は、堂込・栗林編1994『天城遺跡・下島権遺跡』から転載)

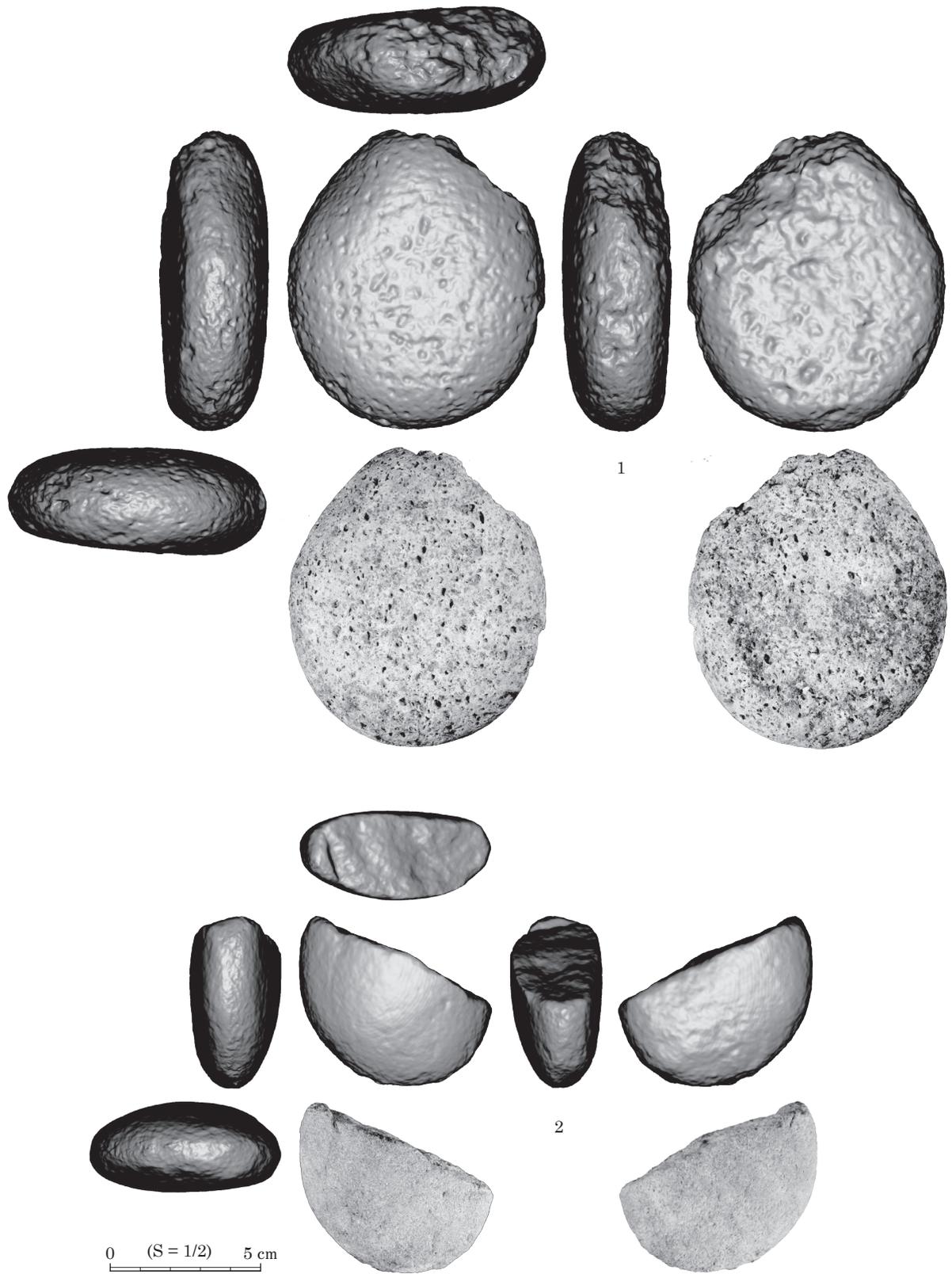


図3. 徳之島ガラ竿遺跡出土礫器 (伊仙町歴史民俗資料館蔵)

たことを示唆する。

中琉球のサキタリ洞遺跡は、I区のIV層からII層で回収されたサンプルが較正年代で25.6 - 18.7 kcal BPとなり、VII層(35.5 - 23.8 kcal BP)の前半期から継続的に洞窟利用がなされていたことがうかがわれる(山崎編2018)。II層(23.7 - 18.7 kcal BP)からは、貝製釣り針や二枚貝に二次加工を施した貝器、貝製装飾品も出土しており、独自の貝器文化と生業形態が発達していたことがわかる(Fujita et al., 2016)。港川フィッシャー遺跡では、4体のヒトの全身骨格と部分骨格が出土しており(Suzuki and Hanihara, 1982)、その周辺で回収された2点の炭化物の年代は較正年代で23.8 - 19.4 kcal BPとなる。下地原洞穴遺跡でも、ヒトの部分骨格が出土しており(小田2011)、洞窟内で出土したカニの年代測定結果は18.7 - 18.3 kcal BPとなる。

一方、中琉球の奄美諸島ではこの時期の遺跡は確認されておらず、無人状態か極めて人口密度の低い状態にあった可能性がある。北琉球に関しても、種子島で船野型細石刃核が伴う細石刃石器群が立切遺跡群(田平編1999)と銭亀遺跡(徳田編2006)で見つかっているのみで、晩氷期直前まで無人地帯であった可能性がある。

4. 晩氷期

縄文時代草創期に当たる晩氷期は、種子島以外の琉球列島では、長らく人類の滞在痕跡が見つからない空白期であった。現在でも、南琉球では該期の遺跡はなく、中琉球でもサキタリ洞遺跡と下原洞穴遺跡の2遺跡だけである。一方、北琉球では、種子島の5つの遺跡で隆帯文土器が出土している。種子島だけ遺跡密度が高く、他の地域は遺跡密度が極めて低い。

中琉球は、サキタリ洞遺跡のI区I層で、人骨と石英製石器が出土している(山崎編2018)。共伴した炭化物や陸産貝類の年代値は、16.9 - 13.2 kcal BPとばらつきがあるが、晩氷期の直前から晩氷期にかけてサキタリ洞が利用されていたと考えられる。出土した石英製石器は剥片や碎片で、沖縄島以南の地域における剥片石器の出土例としては現状で最古である。これらの石英製石器は、文化的な指標となる特徴を示さないため、九州島以北の石器群や台湾・大陸の石器群との文化的関係を議論することは難しい。

徳之島の下原洞穴遺跡では、近年隆起線文土器が出土し(図4)(具志堅編2020)、縄文時代草創期の土器文化圏の南限が徳之島まで拡大する可能性が出てきた。下原洞穴遺跡の隆起線文土器は、IV層から多く出土し、その上のIII・III下層からは波状条線文土器(赤色条線文)(山崎2015)、更にその上層からは南島爪形文土器や曾畑式土器が出土している。各層で回収された炭化物の年代測定も行われているが、ばらつきが大きく各土器型式が残された時期の特定は今後の課題である。

北琉球は、種子島の鬼ヶ野遺跡、奥ノ仁田遺跡、三角山I遺跡、平松B遺跡、横峰C遺跡で隆帯文土器が出土している。他の年代から大きく外れた値を除くと、三角山I遺跡が14.8 - 11.8 kcal BP(藤崎ほか編2004; 藤崎・中村編2006)、鬼ヶ野遺跡が14.3 - 12.1 kcal BP(沖田・堂込編2004; 西本編2009)、奥ノ仁田遺跡が13.8 - 13.5 kcal BP(西本編2009)となる。土器の特徴や礫器類の多さ等からも、九州島南部の縄文時代草創期初頭との共通性が高い(森先2015)。種子島の隆帯文土器が出土する遺跡では、磨製石鏃が共伴する点に特徴があるが、九州島南部では主に縄文時代早期に磨製石鏃が出土する(堂込2019)。下原洞穴遺跡でも多量の磨製石鏃が出土しているが、それらは隆起線文土器が出土した層の上位から出ており、南島爪形文土器が多く出土したI層からIII層で確認されている(具志堅編2020)。

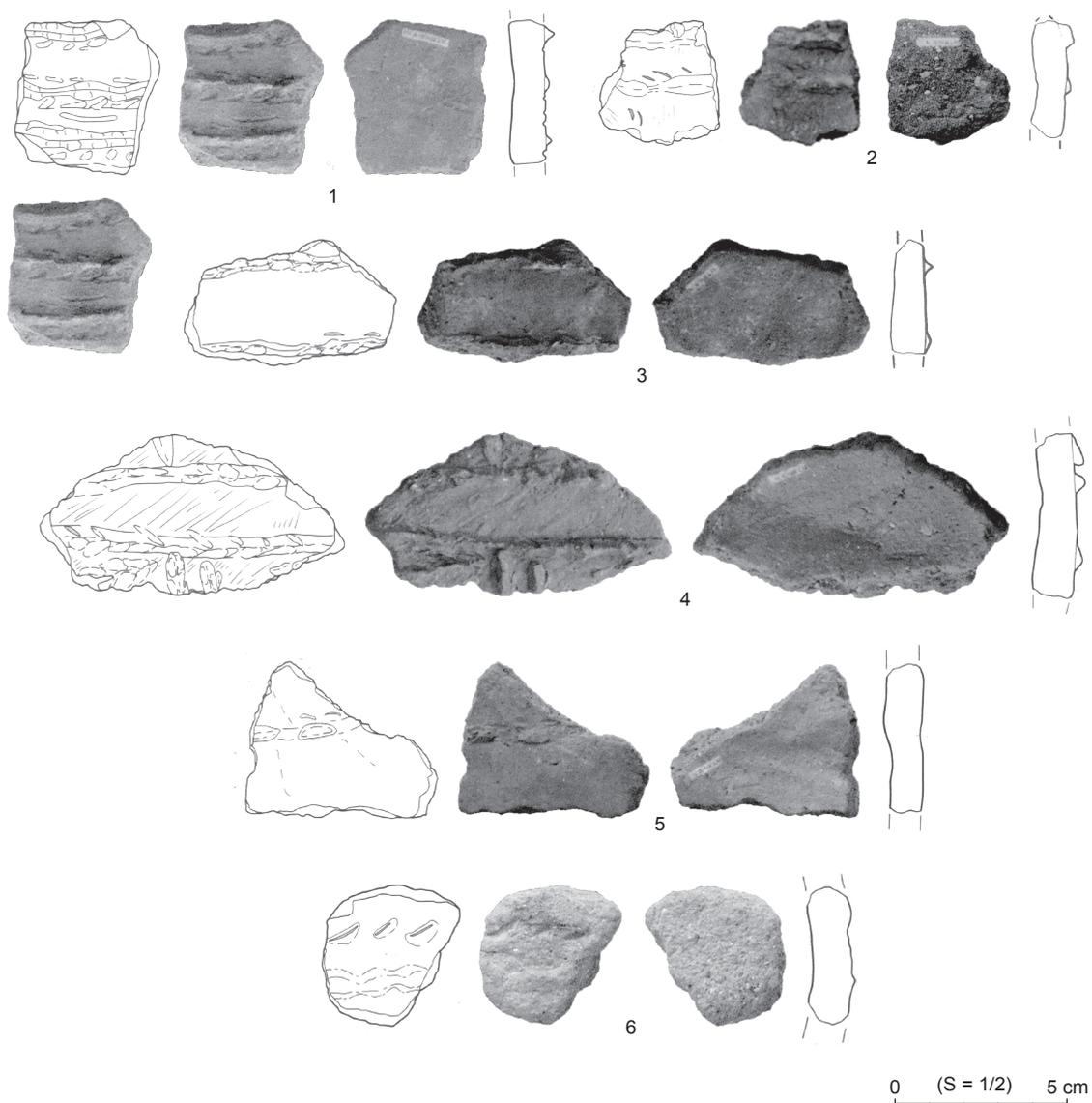


図4. 徳之島下原洞穴出土隆起線文土器 (天城町教育委員会蔵)

1-3. IV層出土、4-6. III・III下層出土。(具志堅編 2020『下原洞穴遺跡・コウモリイヤー遺跡発掘調査報告書』第56図・図版29・第59図・図版32をもとに作成)

5. まとめ

日本列島最古の後期旧石器時代遺跡は、熊本県石の本遺跡群第8区(森先ほか 2022)や静岡県井出丸山遺跡(高雄・原田編 2011)で、いずれも台形様石器群である。その較正年代は、それぞれ 39.0 - 36.8 kcal BP と 38.9 - 37.1 kcal BP である。石の本遺跡群第8区や井出丸山遺跡の年代幅は、山下町第1洞穴遺跡の年代幅より古い方にまとまるが、一部で重複する。日本列島最古の後期旧石器時代石器群と日本列島最古の人類化石の年代は、ホモ・サピエンスが古本州島の九州地方から中部地方と、琉球列島の中琉球地域に、時を大きく違えることなく進出して行ったことを示唆している。その後、古本州島では台形様石器群が各地で出現し増加していくが、沖縄島以南の地域では台形様石器群は出土しない。

一方、中琉球徳之島の天城遺跡における台形様石器群の存在は、九州島の台形様石器群の集団の一



図5 徳之島コウモリイヨ-遺跡（開口部側からドローンで撮影）

部が、遙か南の中琉球へも進出していたことを示唆している（ただし、天城遺跡を含めた奄美諸島の小型剥片石器群の由来に関する議論は、宮田（2011）や山崎（2012）を参照）。後期旧石器時代前半期は、中琉球の沖縄島以南と徳之島以北では遺跡の性格が異なる。徳之島以北の琉球列島では、剥片石器や礫器が出土するが、沖縄島以南の琉球列島では、人骨は出土するが剥片石器は出土しない。サキタリ洞遺跡Ⅰ区Ⅶ層やピンザアブ洞穴遺跡の年代を考慮すると、後期旧石器時代前半期を通じて南琉球から沖縄島に人類がいた可能性があるが、彼らは古本州島の後期旧石器時代前半期石器群とは異なる文化を保ち続けている。また、北琉球種子島の前半期石器群は、炭化物が集中する礫群や多数の礫器を特徴とするが、九州島も南部では台形様石器群に多数の礫器が共伴する事例があり、一定の文化的共通性がうかがわれる。中琉球でも、喜子川遺跡では礫群や炭化物集中が確認されており、年代的には少し新しいものの、当該領域の温暖な気候下において、植物性資源の利用比重が高い生業活動が行われていたと考えられる。

約3万年前以降の後期旧石器時代後半期に入ると、琉球列島の遺跡数が減少する。中琉球の奄美諸島では、現時点で後半期の遺跡が認められず、無人状態か極めて人口密度が低い状態にあったと考えられる。MIS2の寒冷化に伴う生態系の変化により、資源の少ない島嶼環境下で人口を維持することができなかった可能性がある。一方、白保竿根田原洞穴遺跡やサキタリ洞遺跡では長いスパンの人類の痕跡が残されており、より南の沖縄島や石垣島においては、人類が継続的に生息していたと考えられる。これらの地域は、後半期も剥片石器は出土せず、サキタリ洞では貝器文化が築かれた。この時期、奄美諸島が無人か人口密度が低い状態であったことを考慮しても、北からの文化的影響は皆無であった可能性が高い。

晩水期に入っても、琉球列島の人口密度は低いままである。南琉球では、該期の遺跡は認められな

いが、白保竿根田原遺跡や宮古島のツヅピスキアブ洞窟遺跡では、完新世初頭から人類の滞在痕跡が認められている（山崎 2022）。南琉球は、後期旧石器時代の前半期や後半期も各段階 1 遺跡のみと遺跡密度が低い地域であり、後期旧石器時代前半期から完新世初頭を通じてずっと人口密度が低い地域であったのかもしれない。北琉球の種子島も、後期旧石器時代後半期のほとんどの期間は無人島か人口密度が低い状態にあったと考えられ、晩氷期直前の細石刃石器群の頃によりやく人類の居住跡が再度現れる（Kaifu, 2022）。一方、晩氷期に入ると種子島の遺跡数が増加し、隆帯文土器や礫器類を特徴とした文化圏が、九州南部から種子島の地域に認められる。徳之島の下原洞穴遺跡でも、隆起線文土器が出土し、縄文時代草創期初頭に九州島と徳之島の間で文化的交流があった事をうかがわせる。しかしながら、沖縄島のサキタリ洞遺跡でも同じ時期の人類の滞在痕跡が認められるが、現時点で土器は出土していない。沖縄島と徳之島の間には、沖永良部島や与論島があり、両島の地理的障壁は大きくはないが（Kaifu, 2022）、現状では旧石器時代から縄文時代草創期にかけて文化的隔たりが認められる。筆者は、下原洞穴に隣接するコウモリイヨー遺跡（図 5）で発掘調査を行っており、当該地域における文化的交流史の復元を目指して今後も調査研究を進めていきたい。

謝辞

天城遺跡やガラ竿遺跡の資料調査では、伊仙町教育委員会の榎本美里氏や安田未来氏のお世話になり、天城遺跡の石器の写真掲載とガラ竿遺跡の礫器の写真および 3D モデルの掲載許可をいただいた。また、ガラ竿遺跡の礫器の写真撮影と 3D モデルの作成には、東北大学大学院博士後期課程の戸塚瞬翼氏にご協力いただいた。上記の方々に、記して感謝申し上げる。

引用文献

- 旭 慶男・牛ノ濱修編 1988 『土浜ヤーヤ遺跡』 鹿児島県教育委員会
 石堂和博・中村真理編 2005 『横峯 C 遺跡』 南種子町教育委員会
 沖田純一郎・堂込秀人編 2004 『鬼ヶ野遺跡』 西之表市教育委員会
 小田静夫 2011 「下原洞穴と沖縄の旧石器遺跡について」 『南島考古』 30: 1-18.
 Kaifu, Y., 2022. A synthetic model of Palaeolithic seafaring in the Ryukyu Islands, southwestern Japan. *World Archaeology* 54, 187-206.
 Kaifu, Y., Fujita, M., 2012. Fossil record of early modern humans in East Asia. *Quaternary International* 248, 2-11.
 Kaifu, Y., Fujita, M., Yoneda, M., Yamasaki, S., 2015. Pleistocene seafaring and colonization of the Ryukyu Islands, Southwestern Japan, in: Kaifu, Y., Izuhō, Masami, Goebel, Ted, Sato, Hiroyuki, Ono, A. (Eds.), *Emergence and Diversity of Modern Human Behavior in Paleolithic Asia*. pp. 345-361.
 Kobayashi, H., Matsui, Y., Suzuki, H., 1971. University of Tokyo Radiocarbon Measurements IV. *Radiocarbon* 13, 97-102.
 具志堅亮編 2020 『下原洞穴遺跡・コウモリイヨー遺跡発掘調査報告書』 天城町教育委員会
 坂口浩一・堂込秀人編 2000 『横峯 C 遺跡』 南種子町教育委員会
 寒川朋柄・佐野勝宏 2020 「鹿児島県における後期旧石器時代前半期の様相」 『九州旧石器』 24: 143-154.
 Suzuki, H., 1983. The Yamashita-cho Man: A late Pleistocene infantile skeleton from the Yamashita-cho Cave (Okinawa). *Bulletins et Mémoires de la Société d'Anthropologie de Paris* 10, 81-87.
 Suzuki, H., Hanihara, K. (Eds.) 1982. *The Minatogawa Man*. University of Tokyo Press, Tokyo.
 新里亮人 2013 「琉球列島と中国・台湾」 『季刊考古学』 125: 32-36.
 高尾好之・原田雄紀 2011 『井出丸山遺跡発掘調査報告書』 沼津市教育委員会
 Takamiya, H., Kin, M., Suzuki, M., 1975. Excavation Report of the Yamashita-cho Cave Site, Naha-shi, Okinawa. *Journal of Anthropological Society of Nippon* 83, 125-130.
 田村晃一・池田 治 1995 「喜子川遺跡第 3・4 次発掘調査報告」 『青山史学』 14: 1-63.
 田平祐一郎編 1999 『立切遺跡・京塚遺跡』 中種子町教育委員会
 山元謙一・高磯俊幸・川口雅之編 2012 『立切遺跡』 中種子町教育委員会

- 堂込秀人 2019 「南九州縄文時代の磨製石鏃考」『中山清美と奄美学—中山清美氏追悼論集』 pp. 509 - 523, 奄美考古学研究会
- 堂込秀人・栗林文夫編 1994 『天城遺跡・下島権遺跡』伊仙町教育委員会
- 徳田有希乃編 2006 『銭亀遺跡』南種子町教育委員会
- 仲座久宜編 2017 『白保竿根田原洞穴遺跡 重要遺跡範囲確認調査報告書 1—事実報告編—』沖縄県立埋蔵文化財センター
- 西本豊弘編 2009 『弥生農耕の起源と東アジア—炭素 14 年代測定による高精度編年体系の構築—』国立歴史民俗博物館
- 久貝弥嗣編 2015 『宮古島市内遺跡発掘調査報告書—アラフ遺跡・ツヅピスキアブ洞窟・友利元島遺跡—』宮古島市教育委員会
- 藤崎光洋・大久保浩二・上床 真編 2004 『三角山遺跡群 (2) (三角山 II・III・IV 遺跡)』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 藤崎光洋・中村和美編 2006 『三角山遺跡群 (3) 三角山 I 遺跡第一分冊』鹿児島県立埋蔵文化財センター
- Fujita, M., Yamasaki, S., Katagiri, C., et al., 2016. Advanced maritime adaptation in the western Pacific coastal region extends back to 35,000–30,000 years before present. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 113, 11184–11189.
- 藤田祐樹・山崎真治 2022 「南の島—琉球列島」『季刊考古学』 161: 21-24.
- 宮田栄二 2011 「旧石器考古学から見た薩南諸島」『旧石器考古学』 75: 71-76.
- 森先一貴 2015 「更新世末の九州地方における先史狩猟採集民の居住形態」『第四紀研究』 54(5): 257-270.
- 森先一貴・國木田大・池田朋生・長谷部善一・村崎孝宏 2020 「石の本再訪—日本列島後期旧石器時代の開始に関する研究—」『旧石器研究』 16: 43-58.
- 山崎真治 2012 「琉球列島の旧石器人と北上仮説」『九州旧石器』 16: 79-90.
- 山崎真治 2015 「沖縄先史文化起源論をめぐる近年の動向と課題」『南島考古』 34: 5-18.
- 山崎真治編 2018 『沖縄県南城市サキタリ洞遺跡発掘調査報告書 I』沖縄県立博物館・美術館
- 山崎真治 2022 「縄文時代の琉球列島における海洋進出と遠洋航海」『季刊考古学』 161: 57-61.
- 四元延宏・伊藤勝憲 2002 「徳之島・伊仙町小島ガラ竿遺跡の確認調査」『南島考古だより』 69: 3.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., et al., 2020. The IntCal20 Northern Hemisphere Radiocarbon Age Calibration Curve (0–55 cal kBP). *Radiocarbon* 62, 725–757.

日本考古学協会 2023 年度宮城大会
「災害と境界の考古学」
研究発表資料集

発行日 2023 年 10 月 28 日

編集・発行 日本考古学協会 2023 年度宮城大会実行委員会

事務局 〒 980-8577 宮城県仙台市青葉区片平 2 丁目 1 - 1

東北大学埋蔵文化財調査室内

Tel:022-217-4995 Fax:022-217-5103

Email : jaasec2023@m-kouko.net

実行委員会ホームページ <https://jaa2023.m-kouko.net/>

印刷 株式会社 東北プリント

〒 980-0822 宮城県仙台市青葉区立町 24 - 24

Tel:022-263-1166